

英語映画の日本語字幕に見られるポライトネス

Politeness in Japanese Subtitles of English Movies

牛江ゆき子 西尾道子

お茶の水女子大学 お茶の水女子大学

Abstract

Translated movie subtitles must be concise while retaining the original meaning, because they vanish as soon as lines are delivered by the actors. Because of that time limitation, expressions that are not directly related to the propositional meaning of the original, such as politeness, may be changed in the subtitles. This paper explores, based on the framework of Brown and Levinson (1987), 1) whether or not the politeness expressions in the original are retained as they are in the subtitles and 2) if changes are made, how they are changed, by examining Japanese subtitles of two English movies. We argue that politeness expressions in the original lines in English reflect the impositions of individual utterances, but that those in the Japanese subtitles tend to reflect interpersonal distance or power relations between the speaker and the addressee. We also briefly discuss the role of ellipsis in the Japanese subtitles.

1. はじめに

1.1 本稿の目的

一つの画面に表示できる文字数が限られているため、字幕では、元の発話に盛り込まれている文の構成要素のうち省略可能な要素は省略されることが多い。日本語の発話を日本語の字幕表示にしてあるテレビ番組を見るとそのことがよくわかる。省略される要素は副詞、形容詞、代名詞、間投詞、感嘆詞、など多岐にわたるようであるが、発話に使われている丁寧表現も省略の対象になっている。たとえば、NHKで週日の午後6時台に放映されている「首都圏ネットワーク」というニュース番組では、いくつかの丁寧さをあらかず表現が省略されている。「お医者さん」という表現が、敬意などをあらかず接頭語・接尾語の「お」と「さん」が省略されて、「医者」(2008.7.14)と表示されていたことがある。「はっきり伺っていたので」という謙譲をあらかず表現が「はっきり聞いていたので」(2008.7.4)と表示され、動詞から謙譲の意味が取り除かれていた場合もあれば、「なかなか助け出していただけない」という同じく謙譲をあらかず表現が「なかなか助け出してもらえない」(2008.7.31)と表示され、補助動詞から謙譲の意味が除かれていた場合もある。

日本語の発話を日本語の字幕にした場合は日本語の丁寧さをあらかず表現が省略され

ることが比較的明白であるが、英語の発話を日本語の字幕にした場合や、逆に日本語の発話を英語の字幕にした場合、丁寧さをあらわす表現はどのように表現されるのであろうか。¹

本稿では、英語映画の日本語字幕を対象とし、起点言語（英語）の発言で丁寧さをあらわす表現が着点言語（日本語）の字幕においてどのように表現されているのかに焦点を当てて、起点言語の丁寧さをあらわす表現と、着点言語の丁寧さをあらわす表現が Nida (1964) の言うところの *dynamic equivalence*（受け手への効果という内容上の等価性）を持っているのか、また、どのような原則で起点言語の丁寧さをあらわす表現が着点言語の字幕で表現されているのかについて考察する。²

丁寧さという概念を最も大きな枠組みで捉え、体系的に分析したものとして、Brown and Levinson (1987) が挙げられる。彼らはまず、人が社会生活の中で持つ公の自己のイメージを *face* と呼び、*face* には自分の領域・自由を侵されたくないという *negative face* の欲求 (*wants*) と、相手と仲間になりたい、仲間として受け入れられたいという *positive face* の欲求 (*ts*) があるとした。これらの欲求を脅かすものとして、*Face Threatening Acts* (FTA) があるとし、その脅威がどれくらい深刻なものであるのか (*weightiness*) は次のような計算によって割り出されるとした。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x \quad (\text{Brown \& Levinson, 1987: 76})$$

この場合 *D* は話し手と聞き手の間の距離であり、*P* は両者の力関係であり、*R_x* は相手（聞き手）に対する負担の大きさである。いいかえると個々の発話ごと *face* に対する脅威の深刻さが変わりうるということである。この FTA のいわば軽減措置としての *politeness* を想定し、相手の *negative face wants* を守るためにとる言語行動を *negative politeness* とし、相手の *positive face wants* を守るためにとる言語行動を *positive politeness* とした。

具体的な表現としては、例えば相手に時間を尋ねる場合、(1) が相手に遠慮しつつ時間を尋ねている典型的な *negative politeness* の例、(2) が相手と仲間だということを示しつつ尋ねている *positive politeness* の例とされている。

(1) Excuse me, would you by any chance have the time?

(2) Got the time, mate?

(Brown & Levinson, 1987: 80)

日本語で丁寧な表現というとは基本的には Brown and Levinson の言う *negative politeness* をあらわす表現に対応したものを思い浮かべるのが自然であると思われるし、Leech (1983) の提唱している *tact maxim*, *approbation maxim* といった *politeness* の原理も日本語の丁寧な表現に対応するものと考えられる。しかし、一見ぞんざいに見える表現にも相

手との連帯感の構築を目指した意図があり、よってポライトなものなのだ (positive politeness にあたる) という Brown and Levinson の指摘は、より広い視野に立って「丁寧さ」を捉えたものと言えるので、本稿では、起点言語の発話を Brown and Levinson の枠組みで、negative politeness をあらかずものか positive politeness をあらかずものかに分類し、そのようなポライトネス (以下、positive politeness をあらかずした表現も含めるために、「丁寧表現」ではなく「ポライトネス」という表現を使用する) をあらかず発話が映画の字幕においてどのように表現されているのかについて検討する。さらに、起点言語ではポライトネスが明示的に表現されていないのに、着点言語ではポライトネスをあらかず表現が明示的に使われている場合があるのかどうか、ある場合はどのようなものかについても検討する。

Brown and Levinson (1987) が発表された後に、Matsumoto (1988), Gu (1990) などが、東アジアの言語には Brown and Levinson の理論があてはまらないのではないかと、たとえば、日本語における言語表現の丁寧さは各々の発話内容の相手への負担の度合いによって発話ごとに変わるものではなく、話し手と聞き手の社会的な関係によってある程度固定されたものなのではないかということをも主張した。これらの主張が字幕表現にあてはまるかどうかについても考察を加える。

1.2 データと表記方法

本稿で考察する英語映画の台詞と日本語字幕のデータは、*Love Actually*、*Notting Hill* の2本の映画から収集した。英語の台詞は、映画の台詞を文字化して掲載している本から収集し、本の台詞と映画のDVDの台詞との間にずれがある場合には、DVDの台詞(音声)を書き取った。日本語字幕は、映画のDVDの日本語字幕から収集した。³

例を挙げる際は、まず台詞の話し手が誰であることを示した上で、英語の台詞を挙げ、次に日本語の字幕の表現を挙げる。それぞれの例の最後に映画名と英語の台詞を掲載している本のページを示す。本の英語の台詞とDVDの英語の台詞とが異なり、DVDの英語の台詞の音声を書き取った場合には、本のページの後にDVDの時間表示も記す。英語の台詞の表記は基本的に本の表記を用いる。字幕の表現を挙げる際には、スペースで字幕上のスペースと字幕が2行にわたる場合の行替えをあらかずし、「//」で字幕が二枚以上にまたがっている場合の次の字幕への移行をあらかずす。「—」と「・・・」は、字幕においてもともと使用されている記号で、前者は次の字幕へ続くことをあらかずすために用いられ、後者は言いかけた時や言葉が途切れた時などに使用される記号である(岡山2004)。例の一部分のみが議論の対象となる場合には、議論の対象となる部分に下線を施す。地の文において台詞や字幕の表現を挙げる際は、英語の表現は“ ”で囲む。日本語の表現は「 」で囲む。

以下の議論において、英語の台詞を「原文」、日本語の字幕を「字幕」と呼ぶ。映画の中で本稿の議論の対象となる台詞を言っている登場人物を「話し手」、その台詞が向けられている登場人物を「聞き手」ないし「相手」と呼ぶ。

1.3 データの分析方法

データの分析は、基本的に Brown and Levinson において挙げられている positive politeness と negative politeness のストラテジーを参考にして行う。ただし、以下の4点については、別の扱いをする。

a) 省略 (ellipsis)

文の要素の省略は、Brown and Levinson では、positive politeness をあらかずとされている (pp. 111-112)。しかし、日本語においては、もともと、文の要素が明示的に表現されないことが多い。主語や目的語など動詞以外の要素は、聞き手にとって推論可能な場合には表現されないのが普通である。日本語のこのような特性にくわえ、さらに、字幕においては、字数の制約からも、文の要素が省略されやすい (字幕翻訳における省略については、牛江・西尾 2002 を参照)。したがって、日本語の字幕において主語や目的語など動詞以外の文の要素が省略されている場合は、日本語の特性や字幕の制約によるものとみなし、ポライトネスをあらかずものとはみなさない。

日本語では、文のもっとも主要な要素である動詞も、主語や目的語よりは省略されにくい。推論可能であれば省略される場合がある。それは、親しい仲間内の発話だけでなく、目上の人に対する発話においてもみられる (例えば、「どうぞこちらを (お使いになって下さい)」のような動詞および動詞に付く要素 (以下、「動詞部分」) を省略した発話を目上の人に対して用いることが可能である)。動詞は尊敬語 (例:「おっしゃる」) や謙譲語 (例:「申し上げます」) であったり、尊敬や謙譲をあらかず接辞 (「～される」 (尊敬)、「～させていただく」 (謙譲) など) をともなったりして、ポライトネスをあらかずるので、動詞部分が省略されると動詞部分が担ったはずのポライトネスが表現されないことになる。そこで、日本語の字幕において動詞部分が省略されている場合、positive politeness と negative politeness のどちらにも分類せず、「省略」として分類する。

b) 理由を述べる (give reasons)

Brown and Levinson では、当該の FTA を行う理由を述べるのが positive politeness のストラテジーの1つに挙げられている。理由を述べるのは、相手の positive face への配慮というより、単に相手に納得してもらうためである可能性がある。また、台詞において理由が述べられる場合は字幕においても理由が述べられることが普通である。したがって、本稿においては、データの分析・考察を単純化するために、理由が述べられている場合、ポライトネスをあらかずとはみなさず、考察の対象とはしない。

c) 呼称・呼びかけ表現の使用

Brown and Levinson では、呼称 (address term) による呼びかけが negative politeness ないし positive politeness のストラテジーとして挙げられている。しかし、呼称や呼びかけ表現の使用の中には、ポライトネスをあらかずしているのか、単に相手の注意をひくため

に用いられているのか判断が難しいものがある。たとえば、英語でのファーストネームや Mr., Mrs. を用いる呼びかけや、日本語でのファーストネームや「…さん」という呼びかけは、単に相手の注意をひくために用いられている可能性がある。そこで、本稿においては、明らかに尊敬をあらわす呼びかけの表現と親しい間柄で特徴的に用いられる呼びかけ表現のみをポライトネスをあらわすものとして扱う。具体的には、英語に関しては、“sir”, “madam” などの尊敬をあらわす呼びかけ表現の使用を *negative politeness* とみなし、“darling”, “honey”, “mate” など親しい間柄で特徴的に用いられる呼びかけ表現の使用を *positive politeness* とみなす。日本語に関しては、「お客様」、「おかあさま」など尊敬をあらわす呼びかけ表現の使用を *negative politeness* とみなし、「ダーリン」、「子ブタちゃん」、「さあ」など親しい間柄で特徴的に用いられる呼びかけ表現の使用を *positive politeness* とみなす。

d) “please” の使用

Brown and Levinson は、英語の “please” について、FTA を和らげる働きがあると述べているが、*negative politeness* と *positive politeness* のどちらにも分類をしていない。英語の “please” にはさまざまな働きがある。依頼を丁寧なものにする場合もあれば、懇願をあらわす場合もある。機能がさまざまであるので、本稿においては、“please” の使用はポライトネスのストラテジーとは見なさないこととする。

2. 英語映画における英語の台詞と日本語字幕のポライトネス

本節では、英語映画の英語の台詞のポライトネスが日本語字幕においてどのように表現されているかを考察する。

2.1 原文においてポライトネスがあらわされている場合の字幕の表現

原文において *negative politeness* があらわされている場合、*positive politeness* があらわされている場合、*negative politeness* と *positive politeness* があらわされている場合のそれぞれにおいて、字幕の表現がどのようなになっているかを見る。

2.1.1 原文において *negative politeness* があらわされている場合

原文において *negative politeness* があらわされている場合、字幕においては、a) *negative politeness*, b) *negative politeness* + 省略、c) *negative politeness* + *positive politeness*, d) bald on record, e) 省略 の5つの場合が見られた。以下、それぞれの典型的な例を挙げ、最後に考察を行う。(以下において、→ の左側が原文であらわされているポライトネス、右側が字幕の表現をしめす)。

a) *negative politeness* → *negative politeness*

(3) Sarah: Would you just excuse me one second?

悪いけど1秒だけ待って下さる？ (Love Actually: 198)

(3) では、話し手は、自分が長く思いを寄せていた職場の同僚の男性が初めて彼女の家に来てくれたので喜びで興奮し、気を鎮めるために、その男性に少し待つように依頼している。原文、字幕ともに、複数の **negative politeness** のストラテジーが用いられている。原文では、仮定法を用いた疑問文で相手の意向に配慮し、“just”, “one second” という表現で負荷を小さくしている。字幕でも、疑問文で相手の意向に配慮し、「1秒だけ」という表現で聞き手への負荷を小さくし、さらに、「悪いけど」と、聞き手に謝っている。また、「くれる」の尊敬語「下さる」を用いている。

b) negative politeness → negative politeness + 省略

(4) Annie: Would you like to meet the household staff?

公邸職員に挨拶を？ (Love Actually: 58)

(4) では、話し手（首相の顧問）が就任直後に公邸に来たばかりの首相に、首相と会うべく待機している公邸職員に挨拶をすることを提案している。原文では仮定法を用いた疑問文で首相の意向を尊重している (**negative politeness**)。一方、字幕では上昇調で首相の意向を確かめている (**negative politeness**) とともに、動詞部分（たとえば、「挨拶を（なさいますか／されまますか／しますか）？」の（ ）内の表現）が省略されている。

(5) William: Would you like a cup of tea before you go?

帰る前にお茶でも？ (Notting Hill: 32)

(5) は、街頭でジュースを女性（Anna）にひっかけてしまった話し手が、Anna に自分の家で着替えていいと言い、着替えが済んで帰ろうとしている Anna をお茶に誘おうとして言ったせりふである。(4) と同様に、原文では仮定法を用いた疑問文で Anna の意向を尊重している (**negative politeness**)。一方、字幕では上昇調を用いて Anna の意向を尊重する (**negative politeness**) とともに、動詞部分（たとえば、「帰る前にお茶でも（お飲みになりませんか／飲みませんか／いかがですか／どうですか／どう）？」の（ ）内の表現）を省略している。

(6) Anna: Hi. Can I come in? 入っても？ (Notting Hill: 126)

(6) では、話し手がマスコミに追われて友人の男性 (William) の家を訪れ、家の中に入

らせてもらおうとしている。原文では疑問文で相手の意向を尊重している (negative politeness)。一方、字幕では上昇調で相手の意向を確かめている (negative politeness) とともに、動詞部分 (たとえば、「入っても (いいですか/いいかしら/いい) ?」などの () 内の表現) が省略されている。

c) negative politeness → negative politeness + positive politeness

(7) William: Perhaps I could drop round for tea or something.

もし よかったらー // お茶を飲みに 行ってもいいけど

(*Notting Hill*: 48)

(7) は、親しくなった女性 (Anna) からの連絡を 2,3 日放っておいた結果になったので、取っ掛かりに言った台詞である。原文では “perhaps” と仮定法の “could” を用いることにより相手の意向を尊重している (negative politeness)。字幕も「もしよかったら」という仮定を入れて相手の意向を尊重している (negative politeness) が、文末の「いいけど」という表現は、親しい間柄で用いられるくだけた表現である (positive politeness) (より丁寧な表現は「いいですけど」「いいですが」など)。

(8) William: Would you like me to take you through your lines?

セリフの相手をしようか? (*Notting Hill*: 132)

(8) はマスコミに追われて突然やってきた Anna に William がせりふの練習の相手をすることを申し出ている台詞である。原文では仮定法を用いた疑問文で聞き手の意向を尊重している (negative politeness)。字幕は疑問文を用いて聞き手の意向を尊重する (negative politeness) とともに、「しようか?」という親しい間柄で用いられるくだけた表現を用いている (positive politeness)。

(9) Harry: And I just thought that maybe the time had come to do something about it...

そろそろ何か行動に出るべきじゃないかね? (*Love Actually*: 86)

(9) では、Harry が部下の女性に、心を寄せている男性に対してそろそろ行動に出てはどうかと助言をしている。原文では “just” や “maybe” という表現を用いたり、“I think” ではなく “I thought” と過去形を用いたりすることで自分の考えをできるだけ控えめに述べて、聞き手の意向を尊重するように助言をしている (negative politeness)。字幕は疑問文を用いて聞き手の意向を尊重する (negative politeness) とともに、「…じゃないかね?」という親しい間柄で用いられるくだけた表現を用いている (positive politeness)。

d) negative politeness → bald on record

(10) Odd passenger: Just give me a moment. I know I've got it here—if you'd just—could you hold that for a second.

どこに入れたかな これを持っててくれ (*Love Actually*: 314)

(10) では、空港で乗客がゲート係に搭乗券を見せようとして券が見つからず、ゲート係にコートと手荷物を持ってもらおうとしている。原文は仮定法の疑問文を用いて相手の意向を尊重している (negative politeness) が、字幕は単純な命令文である (bald on record)。

(11) Jeff: Oh great. If you don't mind, I would like something, too. Could you bring me up some really really cold water?

じゃ何かもらおうか // うんと冷えた水がいい

...

Jeff: Hey, one more thing. If you don't mind, would you just adios the dishes and take out the trash, too?

ついでに汚れた皿と ゴミを片づけてくれ (*Notting Hill*: 112, 55:20-55:46)

(11) では、ホテルの部屋にいた話し手が、自分の恋人に会いに来た男性のことをルームサービスだと思って、その男性に水を持って来たり、皿やゴミを片づけたりするように頼んでいる。原文では “If you don't mind” という仮定の表現や仮定法の疑問文により相手の意向を尊重している (negative politeness)。しかし、字幕では話し手の要望を一方的に相手に伝えたり、単純な命令文を用いたりしている (bald on record)。

(12) Tony: Judy—could you, ahm, take your top off this time—lighting and camera need to know when we're actually going to see the nipples and when we're not.

ジュディ 上を脱いで // 証明とカメラが乳首の位置を見たいって

(*Love Actually*: 74)

(12) は、映画俳優の代役としてラブシーンを演じている Judy に対して、アシスタント・ディレクターの Tony が照明係とカメラマンからの依頼を伝えている台詞である。原文では、仮定法を用いた疑問文で相手の意向を尊重し、さらに “ahm” でためらいがあらわされている (negative politeness) が、字幕は単純な命令文になっている (bald on record)。ただし、「脱いで」という「脱ぐ」の連用形に助詞「で」が付いたかたちは、たとえば「脱いでくれ」「脱いでください」の「くれ」、「ください」にあたる部分が省略されているとも考えることができ、命令形の「脱げ」より穏やかな言いまわしである。

(13) Juliet: And I remember you filming a lot on the day—and I just wondered if I could look at your stuff.

あなたの— // 撮ったビデオを見せて (Love Actually: 126)

(13)では、話し手が夫の親友に自分たちの結婚式のビデオを見せてくれと頼んでいる。原文では“*I just wondered if I could...*”という過去形や仮定法を用いた表現により相手の意向を尊重している (negative politeness)。一方、字幕は単純な命令文である (bald on record)。ただし、「見せて」は、(12)の「脱いで」と同様に、連用形に助詞「て」が付いたかたちであり、命令形の「見せろ」より穏やかな言いまわしである。

(14) Sarah: Mia, could you turn that now?

ミア ボリュームを下げて (Love Actually: 88)

(14)では、入社して間もない年下の同僚に対し、彼女がかけている音楽の音を小さくするように話し手が頼んでいる。原文は仮定法の疑問文により相手の意向を尊重している (negative politeness)。一方、字幕は単純な命令文である (bald on record)。ただし、(12)、(13)と同様に、「下げて」は命令形の「下げろ」より穏やかな表現である。

(15) Joe: I'm afraid you did it again, Bill.

ビル また間違った (Love Actually: 44)

(15)は、歌の録音中に歌詞を間違えた歌手の Bill に対して、マネージャーの Joe が間違いを指摘するために言った台詞である。原文では“*I'm afraid*”という表現によって指摘が和らげられている (negative politeness) が、字幕では、“*I'm afraid*”にあたる和らげる表現がなく直接的な言い方になっている (bald on record)。

e) negative politeness → 省略

(16) PM: Well, whatever. I'm sure she's a lovely girl – but I wonder if you could redistribute her...

そう言えば そうかも・・・ // いい娘とは思うんだが・・・ // 配置換えを (Love Actually: 180)

(16)では、首相が秘書に部下の配置換えを頼んでいる。原文では“*I wonder if you could ...*”という表現を用いて配置換えが可能かどうかを尋ねる間接的な依頼となっているが (negative politeness)、字幕では動詞部分 (たとえば、「配置換えを (してもらえないだろうか/してもらいたい/してくれ/頼む)」の () 内にあたる表現) が省略されて

いる。

(17) Harry: Can I just pay? 代金を (Love Actually: 218)

(17) では、客が店員に、代金を払いたいと言っている。原文は疑問文により間接的に依頼をしている (negative politeness)。一方、字幕では動詞部分 (たとえば、「代金を (払わせていただけませんか/払わせてもらえませんか/払わせてください/払わせてくれ)」の () 内にあたる表現) が省略されている。

(18) Natalie: Don't try something, sir, just cos it's Christmas...

クリスマスだけど お行儀よく (Love Actually: 292)

(18) では、首相の元秘書で、首相と相思相愛の関係になっている話し手が、首相にクリスマスだからといって悪戯心を起こさないように頼んでいる。原文では“sir”という尊敬をあらわす呼称が用いられている (negative politeness) が、字幕では動詞部分 (たとえば、「お行儀よく (してください/しなさいね/してね)」の () 内にあたる表現) が省略されている。

[考察]

原文において negative politeness があらわされている場合、日本語字幕においては、原文とほぼ同様に negative politeness があらわされている場合は数少なく、negative politeness に加えて positive politeness もあらわされる場合や、bald on record になる場合、negative politeness は保たれながら省略が生じる場合、単に省略が用いられてポライトネスが中立的になる場合が多く見られた。それぞれがどのような場合に見られるかを考察する。

Negative politeness がそのまま保たれるのは、聞き手からまだ少し距離のある相手への軽い (=相手の負担が大きくない) 依頼や誘いにみられた。一方、negative politeness に加えて positive politeness もあらわされるようになるのは、親しくなりつつある男女間での誘いや申し出や、上司から部下への助言においてみられた。Bald on record および省略のみになるのは、職務上の指示 (アシスタント・ディレクターから代役俳優へのかなり頼みにくい内容の指示、首相から秘書への指示) や客から店員等への依頼 (空港の客から係員への依頼、ホテルの客から従業員への依頼、店の客から店員への依頼)、年下の女性から親しくなろうとしている男性への依頼、新人の同僚への苦言的な依頼に見られた。以上より、英語の台詞では、相手にとって負担が大きい依頼や、負担は大きくなくてもまだ親しくなっていない相手への依頼や誘い・申し出の場合には negative politeness が用いられるが、日本語字幕では、相手に負担をかける依頼であっても、話し手が相手よりも力関係が上である場合や相手との距離が近い場合には negative politeness に positive

politeness を加えたり、bald on record としたりすることがわかった。あらわされるポライトネスが、英語の台詞では個々の発話の内容の聞き手への負担の大きさと、話し手と聞き手との関係の両方によって決まるが、日本語の字幕では発話内容の相手への負担の大きさにはあまり左右されず、相手との社会的関係（親しさの程度や力関係）によって決まる傾向があり、Matsumoto (1988) の日本語のポライトネスに関する考察と合致している。

negative politeness に加えて省略が生じるのは、部下が上司に単に次の行動について意向を尋ねたり、友人の家を訪れて家にあがってよいかを尋ねたりなど、相手への負担が小さい場合に見られた。

2.1.2 原文において positive politeness があらわされている場合

原文において positive politeness があらわされている場合、日本語字幕では a) positive politeness, b) positive politeness + 省略、c) bald on record の3つの場合が見られた。

a) positive politeness → positive politeness

(19) Lawrence: Oh sod off, mate. What are you, her dad?

消えな あの女の父親か? (Notting Hill: 104)

(19) は、話し手が、友人との会話の内容を、突然、それを近くで聞いていた初対面の William に批判されて、William に言った言葉。原文では男性間で用いられる、一般に親しみをしめす、くだけた呼びかけ表現の “mate” が用いられている (positive politeness)。字幕は親しい間柄での命令の意をあらわす終助詞「な」を用いている (positive politeness)。

(20) Spike: Aha! See, I'd been getting a female vibe. Good. Speak on, dear friend.

やっぱしな 女の霊気を感じてたんだ // さあ 続けてくれ (Notting Hill: 116)

(20) は、アパートを共同使用している相手の恋の悩みを聞いている話し手が、話を続けるように言っている。原文では “dear friend”、字幕では「さあ」という親しい間柄で用いられる呼びかけが入っている (positive politeness)。

b) positive politeness → positive politeness + 省略

(21) PM: Annie, my darling, my dream, my boat. I need you to do a favour.

アニー ダーリン 僕の救いの船 // 1つ頼みが・・・ (Love Actually: 178)

(21) は、首相から秘書への依頼である。親しい間柄の呼びかけが原文と字幕の両方に入っている (positive politeness)。字幕ではさらに「頼みが」に続く動詞部分 (たとえば、「頼みが (あります/ある/あるんだが)」の () 内にあたる部分) が省略されている。

c) positive politeness → bald on record

(22) Max: Let's face facts. 目を覚ませよ (*Notting Hill*: 118)

(22) は、親友の忠告である。原文では一人称の命令文で話し手もいっしょに「事実を見よう」となっている (positive politeness) が、字幕では単純な二人称の命令文による忠告となっている (bald on record)。

(23) Sarah: Okay, that's done. Why don't you come upstairs in about ten seconds...

どうも 済んだわ // 10 秒したら 2 階に上がって (*Love Actually*: 198)

(23) では、話し手は自分がずっと思い続けてきた男性が家を訪れた際に、2 階の自分の部屋に上がるように言っている。原文では “Why don't you...” という positive politeness の表現が用いられているが、字幕では単純な二人称の命令文が用いられている (bald on record)。

[考察]

原文においては、親友への忠告や誘い、部下への依頼、初対面の相手への命令で positive politeness があらわされているが、日本語字幕においては、初対面の相手への命令と親友への促しは positive politeness、部下への依頼は positive politeness に省略をとめない、親友への忠告・誘いは bald on record となっている。

2.1.3 原文で negative politeness と positive politeness の両方があらわされている場合

原文で negative politeness と positive politeness の両方があらわされている場合、日本語字幕においては a) negative politeness + positive politeness, b) positive politeness, c) negative politeness, d) bald on record の 4 つの場合が見られた。

a) negative politeness + positive politeness → negative politeness + positive politeness

(24) John: Look, ahm...sorry for being a bit forward, but you don't fancy going for a Christmas drink, you know, nothing implied—we could just maybe go and see something Christmassy or something...obviously you don't have to if you don't want to...I was just...I'm rambling now.

クリスマスだし この後 どこかで 1 杯 飲まない？ // 別に深い意味はない 軽いクリスマス気分で・・・ // ムリ強いはしない // もし君さえよければ・・・ (Love Actually: 222)

(24) は、クリスマスに仕事仲間の女性を初めてのデートに誘っている台詞である。原文では “sorry for being a bit forward” と謝ったり、“obviously you don’t have to if you don’t want to” と述べて強要していないことを明白にしたり、仮定法の “could” や “maybe”、“just” などの表現によって相手の意向を尊重したり、相手への負担を小さくしたりしている (negative politeness)。一方で、表現の点では、“sorry for being a bit forward” という省略表現を用いたり、“you know” という相手に同意や理解を求めたり期待したりする表現を用いている (positive politeness)。字幕においても、疑問文を用いるとともに、「ムリ強いはしない」「もし君さえよければ・・・」と述べて、相手への負担を軽減している (negative politeness)。一方、「飲まない？」という表現は、親しい間柄での誘いの表現である (positive politeness)。

b) negative politeness + positive politeness → positive politeness のみ

(25) Natalie’s father: Right, well, perhaps you should come on later,
Plumpy...erm...Natalie...
それじゃ・・・// お前は後から来なさい 子ブタちゃん・・・
ナタリー (Love Actually: 280)

(25) は、父親から娘への提案である。原文では “perhaps” が提案を弱め (negative politeness)、さらに、愛称 “Plumpy” が用いられている (positive politeness)。字幕では、愛称「子ブタちゃん」の使用 (positive politeness) のみである。

c) negative politeness + positive politeness → negative politeness

(26) Harry: Could we be quick ... please.
悪いが もっと急いでくれ (Love Actually: 216)

(26) は、デパートでプレゼントをゆっくり包装する店員に対して急ぐように頼んでいる。原文では、仮定法の疑問文で聞き手の意向を尊重 (negative politeness)。“Could you...” とせず、“Could we...” として一人称複数の “we” を使うことにより話し手を聞き手と一体化している (positive politeness)。一方、字幕は、「もっと急いでくれ」という単純な命令文 (それのみで見れば bald on record とみなされる表現) に「悪いが」という謝る表現 (negative politeness) が追加されているのみである。

d) negative politeness + positive politeness → bald on record

(27) Karen: Darling—could you just make sure the kids are ready to go.

出かける用意をしてて (Love Actually: 242)

(27) は、夫への依頼である。原文では仮定法の疑問文で相手の意向を尊重する (negative politeness) とともに、“darling”という親しい間柄の呼びかけを使用している (positive politeness)。字幕では、単純な命令文となっている (bald on record)。ただし、「してて」は命令形の「してろ」より穏やかな表現である。

[考察]

原文において negative politeness と positive politeness の両方があらわされている場合、日本語字幕においては、初めてのデートの誘いにおいては台詞と同様に negative politeness と positive politeness の両方が用いられているが、父親から娘への助言では positive politeness のみ、客から店員への依頼は negative politeness のみ、妻から夫への依頼は bald on record となっている。原文では話し手と聞き手の関係が近くても、相手の negative face を脅かす発話においては negative politeness (+ positive face) があらわされるが、日本語字幕では、話し手と聞き手との距離が近い場合には、negative politeness と positive politeness のどちらかないし両方が省略される傾向が見られる。

2.2 原文においてポライトネスがあらわされていないが字幕においてポライトネスがあらわされている場合

原文においてポライトネスがあらわされていない (bald on record となっている) 場合、字幕においてもポライトネスがあらわされていない (bald on record となっている) 場合が多いが、a) negative politeness + 省略、b) positive politeness の場合も見られた。

a) bald on record → negative politeness + 省略

(28) Karen: Okay—take a seat. I'll go and check.

調べてみます おかけに (Notting Hill: 54)

(28) は、インタビュー会場で有名女優の Anna の秘書が、雑誌記者と称して Anna との面会を申し込んだ William に、予約を調べる間、座って待つように言った台詞である。原文では単純な命令文 (bald on record) であるのに対し、字幕では、「座る」の敬語表現「おかけに」が使われている (negative politeness)。また、動詞の後半部分 (たとえば、「おかけに (なって下さい/なって)」の () 内にあたる表現) が省略されている。

b) bald on record → positive politeness

(29) Anna: Give me five minutes. 5分待ってね (*Notting Hill*: 110)

(29) では、話し手が、親しくなった William をホテルの自分の部屋に寄らないかと誘った際に、部屋を整えるのに5分待ってくれと頼んでいる。原文では単純な命令文である (bald on record) が、字幕では親しい間柄で用いられる終助詞「ね」が用いられている (positive politeness)。

(30) Bella: And so we must face the fact that from next week, we have to find somewhere new to eat. I just want to say to Tony—don't take it personally. The more I think about things, the more I see no rhyme or reason in life...
来週から どこか新しい店を— // 見つけないと // トニー 気を悪くしないでね // 考えれば考えるほど 人生って理不尽だわ
(*Notting Hill*: 164)

(30) では、友人 Tony のレストランに集まって食事をしている友人たちに、話し手が、Tony のレストランが繁盛せずに閉店することになったので、来週から新しい店を見つけないといけないと告げ、その場にいる Tony に向かって、こうなったのは Tony のせいではないので気にしないようにと、慰めの助言をしている。原文では単純な命令文である (bald on record) が、字幕では (29) と同様に親しい間柄で用いられる終助詞「ね」が用いられている (positive politeness)。

(31) Spike: Come on—open up—this is me—Spikey...
なあ // 言えってば // 俺なんだぜ // スパイクだ (*Notting Hill*: 116)

(31) では、話し手が友人（アパートを共同利用している相手）に対して、悩みを抱え込まずに打ち明けるように促している。原文では単純な命令文である (bald on record) が、字幕では、親しい間柄での呼びかけの「なあ」や親しい相手への要求をあらわす「言えってば」という表現が用いられている (positive politeness)。

[考察]

あらたまった場で立場が上の初対面の相手に配慮を示す場合に、原文では bald on record であるが字幕において negative politeness + 省略となっていた。相手の利益になるよう配慮を示す場合に、相手が配慮を受け入れやすいように（遠慮をしないですむように）相手に直接的に命令をするような bald on record が用いられるという原則 (Brown

& Levinson, 1987: 99) が英語の台詞では働いていると言える。一方、日本語字幕においては、秘書から記者へという立場が上の相手に対して尊敬をあらわす敬語表現が用いられている。相手に負担になるのか、相手の利益になるのかではなく、相手との社会的な関係によってポライトネスの表現方法が決まるという日本語の特性 (Matsumoto, 1988) が反映していると言える。

親しい友人に負担がわずかなことを頼む場合と助言をする場合に、原文では **bald on record** であるが字幕において **positive politeness** があらわされていた。親しい間柄での負担がわずかな依頼や、相手の利益になる助言や申し出においては、原文と字幕ともに、**positive politeness** ないし **bald on record** のいずれもが可能であるようである ((29)–(31) では、原文が **bald on record**、字幕は **positive politeness** となっているが、同様の場合に、(22)、(23) では、原文が **positive politeness**、字幕が **bald on record** となっている。また、(20) では、原文と字幕がともに **positive politeness** となっている。原文と字幕がともに **bald on record** となっている例もあった⁴)。なお、(29)、(30) の字幕で用いられている終助詞「ね」は、一文字なので、字数に制約がある字幕において **positive politeness** をあらわすのに便利な表現である。

3. まとめ

本稿では、英語映画の英語の台詞と日本語字幕におけるポライトネスの表現を考察した。英語の台詞においてあらわされているポライトネスと日本語字幕においてあらわされているポライトネスは一致する場合もあるが、一致しない場合も多く見られた。特徴として、まず、英語の台詞においては、依頼のような、話し手の利益のために聞き手に負担をかける場合、話し手と聞き手の距離が近かったり（夫婦間など）や話し手が聞き手よりも力関係が上である場合（上司と部下、客と店員など）であっても **negative politeness** が用いられるが、日本語字幕ではそのような場合に、たとえ相手への負担が大きくても、くださった表現を用いたり（= **positive politeness** が加わる）、ポライトネスをあらわさなかったり（**bald on record**）する傾向が見られた。一方で、相手にとって利益となる場合に、英語の台詞では **bald on record** であるが、日本語字幕においては、相手との社会的関係によって（相手の立場が上であれば）**negative politeness** があらわされている例が見られた。これらのことから、英語の台詞では、発話の内容が聞き手にとってどのくらいの負担となるか、あるいは、聞き手の利益になるのかどうかによってポライトネスの表現が決まるのに対し、日本語字幕においては、ポライトネスの表現は、個々の発話の内容が聞き手にとって負担となるかどうかや聞き手の利益になるかどうかによって決まるのではなく、話し手と聞き手との社会的関係（親しさの程度や、立場や年齢などの力関係）によって決まると言える。（なお、親しい間柄での負担がわずかな依頼や相手の利益になる助言や申し出においては、英語の台詞と日本語字幕ともに、**bald on record** と **positive politeness** の両方の場合が見られた。英語の台詞においては、負担の小

ささや相手の利益になるということが **bald on record** と **positive politeness** の選択に影響し、日本語字幕においては、話し手と聞き手が親しい間柄であることが **bald on record** と **positive politeness** の選択に影響していると考えられる。))

この結果より、英語の台詞のポライトネスは **Brown and Levinson (1987)** のポライトネスの理論に合致し、日本語字幕のポライトネスは **Matsumoto (1988)** の日本語のポライトネスについての考察と合致していると言える。したがって、英語と日本語それぞれのポライトネスに関する一般的な特徴が英語の台詞と日本語字幕のポライトネスの表現に反映していると考えられる。よって、原文と字幕とで、あらわされるポライトネスは異なっているとしても、それぞれの言語において自然なかたちでポライトネスがあらわされているという点で、**Nida (1964)** の言うところの **dynamic equivalence** (受け手への効果という内容上の等価性) は保持されていると言えるであろう。

さらに、日本語の字幕においては、動詞部分 (動詞および動詞に付く助動詞や助詞などの要素) の省略が多く見られた。要素を省略することが容易にできる日本語の特性が、字数に制約のある字幕において利用されていると言える。1.3 節で述べたように、日本語では動詞部分 (動詞や動詞に付く助動詞や助詞などの要素) によって尊敬や謙譲、丁寧さ、くだけた調子などが示され、ポライトネスがあらわされることが多い。その動詞部分 (たとえば、「挨拶を (なさいます/されますか/しますか?)」や「帰る前にお茶でも (お飲みになりませんか/飲みませんか/飲まない (か) /いかがですか/どうですか/どう?)」、「入っても (よろしいでしょうか/いいでしょうか/いいかしら/いい?)」の () 内の部分) が省略されると、本来動詞部分が担ったはずのポライトネスが明示されなくなることになる。その場合、ポライトネスの解釈は、字幕を読む受け手に任されることになる。しかし、話し手と聞き手との社会的関係によってポライトネスの表現がかなり決まる日本語では、解釈の範囲は実際にはそれほど広くないはずであり、だからこそ、字数制限のある字幕では省略されやすいのではないかと考えられる。

依頼の際に、原文では **negative politeness** や **positive politeness** があらわされている場合、字幕において **bald on record** となっている場合が見られたが、その際、「見せて」、「下げて」というように、動詞の連用形+助詞「て (で)」というかたちをとり、助動詞 («くれ」、「ください」など) が省略されていると考えることもできる場合が多く見られた。これらの表現は、助動詞の分の字数を節約できるという点で、字数制限のある字幕において好まれると同時に、「見せろ」、「下げろ」といった命令形よりも穏やかな言いまわしであるので、**negative politeness** や **positive politeness** に分類はできなくとも、ポライトネスをコントロールする役割を担うと言える。以上から、字幕における動詞部分の省略も、原文と字幕との **dynamic equivalence** (内容上の等価性) を損なうものではないと言える。

今回のデータの考察の結果は以上であるが、今後の課題として次のようなことが考えられる。今回データとした英語映画は2本のみであり、それぞれの映画の字幕翻訳者の翻訳の特徴が結果に反映していた可能性がある。より広くデータを集め、分析すること

により、より確かな結果が得られると思われる。原文と字幕とでのポライトネスのあらわされ方の違いのどこまでが起点言語（英語）と着点言語（日本語）のそれぞれの一般的な特性を反映するものであり、どこが字数に制約がある字幕翻訳の特性によるのかということは、本稿では十分なデータがなく論じることができなかった。今後、起点言語が日本語、着点言語が英語である日本語映画の英語字幕を研究して、本稿の結果と比較し、この点について検討したい。本稿では映画の字幕翻訳を考察の対象としたが、今回の映画のような、登場人物の性格や対人関係の描写が重要な意味をもつジャンルと、ニュースやトークショー、インタビュー番組のような、事実や人の考えなどの情報（の内容）を正確に視聴者に伝えることが重要であるジャンルとでは、字幕翻訳におけるポライトネスのあらわされ方に違いがある可能性がある。ジャンルと字幕翻訳の関係を調べることも今後の課題である。

著者紹介：

牛江ゆき子 (USHIE Yukiko) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。専門は英語学 (テキスト言語学)。主な論文に「定冠詞と不定冠詞の表出的機能について」『英語青年』第 150 巻/第 3 号：178-180. 2004 年) など。

連絡先：ushie.yukiko@ocha.ac.jp

西尾道子 (NISHIO Michiko) お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授。専門は英語学 (語用論)。主な論文に「日英同時通訳における情報構造の保持と通訳文の語順に関する一考察」(『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 53 巻 171-183. 2000 年) など。

連絡先：nishio.michiko@ocha.ac.jp

【注】

- 1) 丁寧さに限らず、一般的に、英語の台詞を日本語の字幕にした場合、文のさまざまな構成要素が省略されることが明らかにされている。(牛江・西尾 2002)
- 2) Nida (1964) は、翻訳には、形式 (form) と内容 (content) の両面の等価性 (formal equivalence) を重視する翻訳 (formal-equivalence translation) と、形式上の対応にはこだわらずに、受け手への効果という内容上の等価性 (dynamic equivalence) を重視する翻訳 (dynamic-equivalence translation) とがあるとしている。現実にはどちらの等価性に比重をおいて翻訳するかは、翻訳されるものの種類や内容、翻訳の目的、対象とする読者の種類などさまざまな要因によって左右されるとしている。
- 3) 本稿でデータ収集に用いた英語映画の DVD およびスクリプトは以下のとおりである。
Love Actually [DVD] リチャード・カーティス監督 ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン 2006
Notting Hill [DVD] ロジャー・ミッチェル監督 ポニーキャニオン 2000
『ノッティングヒルの恋人』リチャード・カーティス著 愛育社 1999

『ラブ・アクチュアリー』 (DHC 完全字幕シリーズ) DHC 2004

- 4) i) - iii) は、親しい間柄で負担の小さな依頼をする場合と相手の利益になる申し出や助言をする場合に、原文と字幕がともに bald on record となっている例である。

i) William: Hand it over. Basic plot?

いいよ 貸して // 君の役は? (Notting Hill: 132)

ii) Anna: Drink tea—there's lots of tea.

お茶でも飲んで たくさんあるわ (Notting Hill: 172)

iii) Max: Never trust a vegetarian.

ベジタリアンを信じるな (Notting Hill: 190)

i)-iii) はいずれも友人同士の会話である。i) では、台詞の読み合わせを手伝うことにした話し手が、聞き手が持っている台本を貸してもらおうとしている。ii) では、映画の撮影中に撮影現場を訪れた聞き手に、話し手が、撮影が終わるまで待つように頼んだあと、お茶を飲むことを勧めている。iii) では、話し手が意見を求められて聞き手に助言をしている。いずれにおいても、原文と字幕ともに、単純な命令文が用いられている (bald on record)。

なお、bald on record は、緊急時など、話し手に相手の face に配慮をする余裕や気持ちがなく、相手の face を守るより効率が優先される場合にも選択される (Brown & Levinson, 1987: 95-97)。iv) は、そのような場合に原文と字幕がともに bald on record となっている例である。

iv) William: Don't even think about it. Go away immediately. Go away.

黙って出てって下さい すぐに (Notting Hill: 182, 01:41:37)

iv) は、話し手が前に別れた恋人 Anna からもう一度つきあって欲しいと今まさに言われようとしているときに店を訪れた世話の焼ける客に対する台詞である。Anna の話が佳境にかかっていたので、客の顔を見た途端に即追い返そうとしている。客の face は完全に無視され、原文と字幕ともに、単純な命令文が用いられている (bald on record)。

【参考文献】

- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gu, Y. (1990). Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics* 14, 237-257.
- Leech, G. (1983). *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- Nida, E. A. (1964). *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E. J. Brill.
- 岡山徹 (2004) 「字幕の表記について」『ラブ・アクチュアリー』(DHC完全字幕シリーズ) DHC. p. 35.

牛江ゆき子・西尾道子 (2002)「英語の映画における台詞と日本語字幕の比較：文の要素の省略について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第55巻：111-130.